日本フェミニスト経済学会 2020 年度大会趣旨説明

共通論題テーマ：「相談支援」という労働――公的ケアの搾取と非正規化

座長　藤原千沙（法政大学）

2020 年度大会の共通論題シンポジウムは上記テーマで開催した。COVID-19（新型コロナウイルス感染症）に揺れた 2020 年は、多くの学会や研究会でコロナ禍の問題が取り上げられた。本学会ではあえて直接的なテーマにはしなかったが、「相談支援」「公的ケア」というテーマは、コロナ禍のもとで私たちが直面した問題と密接に関係している。

外出自粛や“ステイホーム”が呼びかけられ、経済活動がストップしたと言われたなかでも、公共サービスの相談支援の窓口は停止できなかった。それは「相談支援」という労働は、市民の命を支えるエッセンシャルワークだからであり、しかもコロナ対策の給付金等の窓口では“相談崩壊”と言われるほど、相談員や支援者の労働は過酷を極めた。

保育士や介護士をはじめ、公的ケアを担う者の賃金は低く、非正規が増え、人の入れ替わりも激しいといった問題は、コロナ禍の前から指摘されていた。そこで同一労働同一賃金の考え方を踏まえて、2020 年 4 月から「会計年度任用職員制度」がスタートしたが、この新しい制度は非正規公務員の待遇改善につながるのだろうか。

国際フェミニスト経済学会（International Association for Feminist Economics）は、2020 年 4 月から 7 月にかけて、COVID-19 パンデミック危機をフェミニスト経済学はいかに捉えるか、YouTube を通して世界に発信し、「普遍的な社会的プロビジョニング」に関する声明を発表した（http://www.iaffe.org/covid19-pandemic/）。公的ケアは社会的プロビジョニングそのものであり、日本では、その多くが非正規労働者によって担われている。「相談支援」という支援者の労働を支えることは、その支援を受ける私たち自身の生命と暮らしを守ることであり、経済社会全体にとって重要であることを、日本社会の文脈のなかで、フェミニスト経済学として考えるシンポジウムとして企画した。

本誌には、当日の発表をもとに、4 人の報告者が書きおろした論文が掲載されている。

竹信論文は、非正規公務員に女性が多いことは決して偶然ではなく、強固なジェンダー秩序を基盤にケア的公務を「周辺」と位置づける公務労働のあり方は、業務の質の低下、行政不信の拡大、公共サービスの縮小というサイクルを通して、私たちの暮らしを脅かしていることを告発する。

上林論文は、私たちの身近な基礎自治体である市区町村職員の３人に１人はもはや非正規公務員である現状を示すとともに、なぜこれほどまでに公務労働が非正規化したのか、公務員の定数削減と公共サービスの拡大という矛盾した要請に女性が動員された構図を明らかにしている。

小川論文と戒能論文は、COVID-19 という感染症とともに、「シャドーパンデミック（影に隠れた世界的大流行）」と呼ばれた DV（ドメスティック・バイオレンス）とその支援にあたる相談員の労働に焦点を当てたものである。

小川論文は、DV の民間シェルターを支える支援者たちが、いかなる立場や待遇で被害者の命をつなぎ生活再建を支えているのかを示しつつ、公的機関による支援と民間シェルターによる支援の一連性、つまり民間シェルターの社会的位置づけとその公益性を提示する。民間シェルターによる支援は、その意味において公的ケアの一環であり、日本の公的な財政援助の貧弱さは、支援者の労働問題に直結している。

戒能論文は、DV 支援にもかかわる婦人保護事業の相談員について、仕事内容が複雑で専門性を必要とされているにもかかわらず、低賃金と長時間労働を強いられ、正当な評価や権限もなく、行政組織内では孤立と周縁化が進み、支援ニーズに十分に対応できない問題を挙げる。困難に直面する女性たちの権利を回復して、人間としての尊厳を取り戻すためには、彼女たちと伴走する支援員についても、働く者としての尊厳が保障されなければならないと訴える。

2020 年 9 月 13 日に開催された本学会シンポジウムには、全国から会員・非会員を合わせて 184 人の参加申込みがあり（登壇者を除く）、当日は実際に 128 人が参加した（登壇者を含む）。4 人の発表の後、ディスカッションの時間に寄せられた Zoom ウェビナーの Q & A には 21 件の入力があり、シンポジウム終了後に表示した感想フォームには 31 件の感想が届いた。学会としてはじめてオンラインで開催するシンポジウムだったが、運営面においては好意的な感想が寄せられ、また報告者の１人は学会の大会でこれほど内容の濃い感想はみたことがないと驚くほど、感想の半分以上は自身の問題や自身の身近な問題としてシンポジウムの議論を受け止めているものであった。私自身、当日に学んだ 4 人の発表と参加者の感想によって、この問題の深刻さや根深さをあらためて痛感した。4 人の報告者と当日の参加者、そして運営を担っていただいた大会本部・お茶の水女子大学の大橋史恵・板井広明の両氏に対して、心から感謝したい。